

源氏物語「桐壺」冒頭

いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際に、はあらぬがすぐれてときめき給ふ有けり。はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、めざましき物におとしめそねみ給ふ。同じ程、それよりげらうの更衣たちはまして安からず。朝夕の宮仕へにつけても人の心をのみ動かし、うらみを負ふ積りにやありけむ、いとあづしくなりゆき物心ぼそげに里がちなるを、いよいよあかずあはれなる物に思ほして、人のそしりをもえ憚らせ給はず、世のためしにも成ぬべき御もてなしなり。

上達部・上人などもあいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にもかかることの起りにこそ世も乱れあしかりけれ、とやうやう天の下にもあぢきなう人のもてなやみ種に成て、楊貴妃のためしも引出でつべくなり行に、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひ給ふ。

父の大納言は亡く成て、母北の方なんいにしへの人のよしあるにて、親うち具しさしあたりて世のおぼえ花やかなる御方がたにもいたうおとらず、何事の儀式をももてなし給ひけれど、取りたててはかばかしき後見しなければ、こととある時は猶寄り所なく心ぼそげなり。

先の世にも御契りや深かりけむ、世になくきよらなる玉のおの子御子さへ生まれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎまいらせて御覧するに、めづらかなる児の御かたかなり。一の御子は右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君と世にもてかしづききこゆれど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をばわたくし物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。

源氏物語「桐壺」＊現代語訳＊

どの帝の御世であったか、女御や更衣が大勢お仕えなさっていた中に、たいして高貴な身分ではない方で、きわだって帝の寵愛を集めていらっしやる人があった。入内（じゅだい）した初めから、自分こそはと気位の高い女御の方々は、分不相応な者だと見くんだりなさっている。同じ身分やその方より低い身分の更衣たちは、女御たち以上に心が穏やかではない。朝晩のお仕えにつけても、周囲に不快な思いをさせて、嫉妬を受けることが積もり積もったせいであろうか、ひどく病気がちになってしまい、どこか心細げにして里に下がっていることが多いのを、帝はますますこの上なく不憫なことだと思いにいられて、誰の非難（寵愛する妃の悪口）をもお構いなさるることがなく、後世の語り草になりそうなほどの扱いようである。

上達部・殿上人なども、その状況を横目で見ていて、とても眩しくて見ていられないほどの御寵愛ぶりである。中国の唐でも、このようなことが原因となって、国が乱れ、悪くなったのだと、次第に国中でも困ったことだと言われるようになり、人々が持て余す悩みごとの種となって、（玄宗皇帝を魅了した）楊貴妃の例まで引き合いに出されそうになっていくので、非常にいたたまれないことが多くなっていくが、もったいないほどの帝のお気持ちに類例がないこと（自分を非常に大切に愛してくれること）を頼みにして何とか宮仕え（後宮生活）をしていらっしやるのである。

父親の大納言は亡くなって、母親の北の方が古い家柄の出身で教養のある趣味人なので、両親とも揃っていて、今現在の華やかな身分にある方々にも見劣りしない程度に、どのような儀式にも対処なさっていたが、これといったしつかりとした後見人（後ろ盾）がないので、大事な儀式が行われる時には、やはり頼りとする人もなくて心細い様子である。

前世でも深いお約束（縁）があったのだろうか。この世にまたとないほどに美しい玉のように光り輝く男の御子までがお生まれになった。早く早くと待ち遠しくお思いになられて、急いで宮中に参内させて御子を御覧あそばすと、類稀な若宮のお顔たちの良さである。

第一皇子は、右大臣の娘の女御がお生みになった方で、後見がしつかりとしていて、当然のように皇太子になれる君だと、世間も大切に存じ上げているのだが、この御子の輝くばかりの美しさとは比べようもなかったなので、一通りの形ばかりのご寵愛であって、この若宮の方を、自分の思いのままに可愛がられて、大切にあそばされていることはこの上もない。